

ポルトガル語の硬口蓋子音前に現れるヨッドの非線状的音韻解釈¹

Interpretação fonológica não-linear do iode que aparece antes de consoante palatal em português

牧野 真也

Shin'ya MAKINO

§1. はじめに

ヨーロッパの標準ポルトガル語（以下、標準 PE）では、² 母音音素として /ieɛ(v) a o u/ が対立するとされており、強勢開音節では、これらの実現である長母音 [V:] ([V] は母音一般の略号で、強勢母音であることを示す場合は母音記号の上に鋭音符を使用する) と、これと同音質の [V] にヨッド [j] を伴った二重母音 [Vj] の対立も弁別的である (p[á:]ra 「止まる (直説法現在三人称単数)」 - p[áj:]ra 「舞う (直説法現在三人称単数)」)。しかしながら、硬口蓋子音 /ʃ ʒ/ の前に位置する開音節に限ってはこの状況が異なっており、³ 強勢母音が [V:] ~ [Vj] の非弁別的な変異を示す場合 (r[ó:]xo ~ r[ój:]xo 「赤紫色 (の)」) と、このような変異を示さずに常に二重母音 [Vj] で実現される場合 (p[é:]xe 「魚」) とが認められる。

拙論 (牧野 2005) では、コインブラ変種の母語話者に対する聞き取り同定テストをもとに、機能主義的な枠組みの中で、常に [Vj] で実現される形態は 2 音素連続 /V/+/j/ を有すると解釈した。上記の p[é:]xe や d[é:]xa 「せりふ」などから [j] が欠けた *p[é:]xe や *d[é:]xa は多くの話者にとって同定不能であり、それゆえ [j] の有無が語の弁別・同定に関与していると考えられるからである。他方、[V:] ~ [Vj] の変異を示す形態の [j] をこれと同じように考えるわけにはいかない。たとえば [j] を欠く r[ó:]xo もまた r[ój:]xo と同一の語と認定されるからである。前記の拙論では、このような場合には /V/ と /V/+/j/ の間に揺らぎ *flutuação* が認められると解釈した。⁴ しかしながら、他の言語事実をも考慮に入れてより包括的に検討したところ、この解釈は拙速である可能性が出てきた。

たとえば d[é:]xa ≈ d[é:]xar 「残す (直説法現在三人称単数 = 不定詞)」という強勢交替が示しているように、⁵ 強勢音節において常に二重母音 [Vj] を有し、それが /V/+/j/ の実現であると解釈されうる形態は、無強勢音節にも等しく [Vj] を有している。そして、この無強勢音節の [Vj] の場合も、たとえば d[é:]xar から [j] を消去した *d[é:]xar は同定不能であるから、やはり 2 音素連続 /V/+/j/ の実現と考えられえよう。しかるに、強勢音節に [V:] ~ [Vj] の変異の認められる形態が、もし単一音素 /V/ と 2 音素連続 /V/+/j/ の間で揺らぎを示しているのであれば、そうした形態でも無強勢音節に /V/+/j/ の実現に相当する [Vj] が現れるはずである。だが実際には、b[á:]xa ~ b[áj:]xa ≈ b[a:]xar ~ b[aj:]xar 「下げる」のようにこの条件を満たす形態がある一方で、t[á:]xa ~ t[áj:]xa ≈ t[ə:]xar 「課税する」のように無強勢音節に [Vj] が現れない例も存在するのである。

では、なぜ強勢音節には [V:] ~ [Vj] の変異が認められるにもかかわらず、無強勢音節にはそのよう

な変異の認められぬ例が存在するのであろうか。このような場合、強勢音節にあって無強勢音節にないもの（あるいはその逆）が件の変異の有無を条件づけていると考えるのが理の当然であろう。しかるに、それは「強勢付与の有無」であり、さらには強勢の有無によって決定される「音量の差」である。ゆえに本論考では、強勢の有無とそれによって決定される音量の差という観点から、/ʒ/の前に現れる母音の変異の問題について再び検討を行うことにしたい。なお、以下では紙数の都合上、同様の議論が成立する /ʒ/ の前に関しては検討を省略し、/ʒ/ の前の開音節に焦点を絞ることとする。

§2. 音韻レベルでの長母音 /V̄/ と単母音 /V̆/

現代の標準 PE について母音音素に長短の音韻的対立を認める立場は一般的ではない。しかしながら「音量」の対立を仮定することによって説明が容易となる音声事実が存在する。以下ではそのいくつかを例示し、「音韻レベルでの長母音と短母音」の存在を措定した後に、それを立脚点として議論を進めることにしたい。

§2-1. 無強勢母音の「弱化」

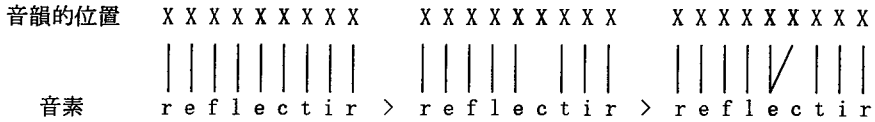
当該言語では、同一形態素の強勢母音と無強勢母音との間に「音質」と「長さ」の交替が一般的に認められる（この現象をポルトガル語学では伝統的に「無強勢母音の弱化 *redução*」という）。

[é:] [é:] ≈ [i:]	pr[é:]ga ≈ pr[i:]gar (< lat. <i>plīcāre</i>)	; d[é:]vo ≈ d[i:]ve ≈ d[i:]ver (< lat. <i>debēre</i>)
[á:] ≈ [e]	[á:]ta ≈ [e]tar (< lat. <i>aptāre</i>)	; b[á:]to ≈ b[á:]te ≈ b[e]ter (< lat. <i>battuēre</i>)
[ó:] [ó:] ≈ [u]	m[ó:]ra ≈ m[u]rar (< lat. <i>morāri</i>)	; m[ó:]vo ≈ m[ó:]ve ≈ m[u]ver (< lat. <i>movēre</i>)

これに対して一部の形態では「長さ」の交替は一般的であるが「音質」の交替は認められない。

[é:] ≈ [e]	pr[é:]ga ≈ pr[e]gar (< lat. <i>praedicāre</i>)	; refl[é:]te ≈ refl[e]tir (< lat. <i>reflectire</i>)
[á:] ≈ [a]	g[á:]nha ≈ g[a]nhar (< lat. <i>*guanjanāre</i>)	; [á:]to ≈ [a]tor (< lat. <i>actōre</i>)
[ó:] ≈ [o]	c[ó:]ra ≈ c[o]rar (< lat. <i>colorāre</i>)	; ad[ó:]ta ≈ ad[o]tar (< lat. <i>adoptāre</i>)

語源的に見ると、前者グループの無強勢母音は「単母音＝短母音」に由来するのに対し、後者グループの無強勢母音は「単母音＋単母音 → 母音縮合 *crase* → 長母音」か「借用語の単母音＋内破子音 C → C の脱落による代償延長 → 長母音」に由来する点で異なっている。ここで「音素」と「それらが記号表現内で占める時間的位置＝音韻的位置」を区別する立場に立脚し、その「音韻的位置」を X で記せば、*reflectir* 「反射する」の史的变化は次のように表示することができよう。



この図式的表示では、まず初めの段階において、強勢前母音 *e* および同音節の内破子音 *c* がそれぞれ音韻的位置 *X* を 1 つづつ占めており、それが連結線 (|) によって示されている。その次の段階では、閉音節を嫌う PE の傾向 (牧野 2004², p.207) によって内破子音 *c* が消失し (連結線の削除によって表示)、最後には、その子音 *c* が占めていた音韻的位置を母音 *e* が占めるようになる (2 つの *X* と連結する *e* によって表示)。このようにして、強勢前母音 *e* は 2 つの連続する音韻的位置 *XX* を占めるようになったのである (代償延長)。また、連続する 2 単母音 *ee* を起源に有する *pregar* (< *preegar*) 「説教する」の場合も基本的には同様であり、同一音素の継起が嫌われて 1 つめの *e* が消失し、その音韻的位置 *X* を後続の *e* が占めるようになったと考えられる (母音縮合)。そして「15 世紀に、母音接続に置かれた母音の縮約が完了したとき、それらの母音は、短く狭い強勢前単母音… (中略) …と対立して、長く広がったはずである」(TEYSSIER 1981, p.42)。その後、半広長母音 *e* は多くの個人語において音声レベルでの長さは失ったものの、*refl[e]tir* や *pr[e]gar* などの形において音質を保ち続けたまま現在に至っている。他方、語源的に単母音である *pregar* 「打ち止める」の強勢前母音 *e* は、ただ 1 つの音韻的位置 *X* を占め続け、15 世紀の「短く狭い [e]」(同 p.42) の段階を経た後、「18 世紀、それもおそらくは 1750 年以降」(同 p.62) に音声変化を被り、今日では *pr[i]gar* の形で実現されている。さて、ここで *reflectir* の史的变化を、連結線等を省略して *reflectir* > *refl^{xx}e^{xx}tir* > *refl[e]tir* と簡潔に表記すれば、上で挙げた諸例の史的变化もこれに倣って次のように示すことが可能である。

^x pregar > pr[ⁱ]gar	⇔	^{xx} preegar > ^{xx} pr ^e e gar > pr[e]gar	;	^{xx} reflectir > refl ^e ^{xx} tir > refl[e]tir
^x atar > [v]tar	⇔	^{xx} gaanhar > ^{xx} g ^a anhar > g[a]nhar	;	^{xx} actor > ^{xx} a ^e tor > [a]tor
^x morar > m[u]rar	⇔	^{xx} coorar > ^{xx} c ^o ora > c[ɔ]rar	;	^{xx} adoptar > ^{xx} ad ^o ptar = ad[ɔ]tar

他方、強勢母音は、語源的な長短に関わらず、今日では両グループにおいて長母音で実現される。

^x prega > pr[^e]ga	⇔	^{xx} preega > ^{xx} pr ^e e ga > pr[^e]ga	;	^{xx} reflecte > refl ^e ^{xx} e > refl[^e]te
^x ata > [á:]ta	⇔	^{xx} gaanha > ^{xx} g ^a anha > g[á:]nha	;	^{xx} acto > ^{xx} a ^e to > [á:]to
^x mora > m[ɔ:]ra	⇔	^{xx} coora > ^{xx} c ^o ora > c[ɔ:]ra	;	^{xx} adopta > ^{xx} ad ^o pta > ad[ɔ:]ta

つまり、現代標準 PE の母音は強勢開音節では一般に長母音として実現され、そして強勢を失うと、

ある場合には「強勢母音と同音質の無強勢短母音」で実現され ($g[\acute{a}:]nha \approx g[a]nhar$ 「得る」), またある場合には「強勢母音とは音質の異なる無強勢短母音」で実現されることになる ($m[\acute{a}:]ta \approx m[ɐ]tar$ 「殺す」など). では, 共時的観点から見て, これらの言語事実はどのように解釈すればよいのであろうか.

ひとつには, たとえば $g[\acute{a}:]nha \approx g[a]nhar$ は $g/\acute{a}/nha \approx g/a/nhar$ の実現であるのに対して $m[\acute{a}:]ta \approx m[ɐ]tar$ は $m/\acute{a}/ta \approx m/ɐ/tar$ の実現であるとの解釈が可能であろう. つまり, 標準 PE には, 強勢の有無にかかわらず開音節に同一の音素を有する形態 ($g/\acute{a}/nha \approx g/a/nhar$) と, 強勢の有無によって異なる音素を有する形態 ($m/\acute{a}/ta \approx m/ɐ/tar$) が存在すると考えるのである (BARBOSA 1983; 1994¹; 1994²). これは, $[\acute{a}:]$ と $[\acute{e}:]$ および $[a]$ と $[ɐ]$ は, 強勢開音節と無強勢開音節でそれぞれ弁別的に対立しているので ($cant[\acute{a}:]mos$ 「歌った (直説法完結過去一人称複数)」 - $cant[\acute{e}:]mos$ 「歌う (直説法現在一人称複数)」や $[a]mor$ 「アモール (地名)」 - $[ɐ]mor$ 「愛」など), 対立する $/a/$ - $/ɐ/$ の実現であるとの解釈に基づいている. この考え方にしたがえば, 強勢の有無に左右されるのは母音音素の実現における音声的長短だけであり, $[\acute{a}:] \approx [ɐ]$ のような音質の交替は強勢の有無とは無関係で, 基底の音素そのものが異なるがゆえとなる.

このような古典的解釈に対して, 中世に成立した音量的対立が今日もなお維持されていると考え, 以下のように説明することも可能である. まず, 標準 PE には, 音韻レベルで「2つの時間的位置 XX と結びついている音韻的長母音 $\overset{XX}{/V/}$ 」と「1つの時間的位置 X としか結びついていない音韻的短母音 $\overset{X}{/V/}$ 」が対立する. 無強勢の場合, 音韻的短母音 $\overset{X}{/V/}$ は音声レベルでは音質の変化を伴った短母音で実現される. これに対して音韻的長母音 $\overset{XX}{/V/}$ は長さは失っても音質は変化せずに $[V]$ で実現される.

【無強勢開音節：音韻的長母音 $\overset{XX}{/V/}$ および音韻的短母音 $\overset{X}{/V/}$ とその音声的实现】

長	$\overset{XX}{/ɛ/} \rightarrow [ɛ]$	短	$\overset{X}{/ɛ/} \overset{X}{/ɛ/} \rightarrow [i]$
母	$\overset{XX}{/a/} \rightarrow [a]$	母	$\overset{X}{/a/} \rightarrow [ɐ]$
音	$\overset{XX}{/ɔ/} \rightarrow [ɔ]$	音	$\overset{X}{/o/} \overset{X}{/ɔ/} \rightarrow [u]$

他方, 強勢を付与された場合, 音韻的長母音 $\overset{XX}{/V/}$ はそのまま長く音声的長母音 $[V:]$ で実現されるが, 音韻的短母音 $\overset{X}{/V/}$ は音声レベルでは X が新たに与えられて音声的長母音 $[V:]$ として実現する.

【強勢開音節：音韻的長母音 $\overset{XX}{/V/}$ および音韻的短母音 $\overset{X}{/V/}$ とその音声的实现】

長	$\overset{XX}{/ɛ/} \rightarrow [ɛ:]$	短	$\overset{X}{/ɛ/} \overset{X}{/ɛ/} \rightarrow [ɛ:] [ɛ:]$
母	$\overset{XX}{/á/} \rightarrow [á:]$	母	$\overset{X}{/á/} \rightarrow [á:]$
音	$\overset{XX}{/ɔ/} \rightarrow [ɔ:]$	音	$\overset{X}{/ó/} \overset{X}{/ɔ/} \rightarrow [ó:] [ɔ:]$

ここまでのデータではいずれの解釈も可能であり, むしろ前者のほうが簡潔に思われよう. だが,

次に見るように、現代標準 PE には後者の解釈を支えるような現象が観察されるのである。

§2-2. 共時的な母音縮合

たとえば *fica* 「とどまる (命令法二人称単数)」の語尾母音 *-a* および *aqui* 「ここ」の語頭母音 *a-* はいずれも無強勢母音であり、各語が単独で発音されると [ɐ] で実現される (fic[ɐ] と [ɐ]qui)。ところが、この2語が連続して *fica aqui* 「ここにいなさい」となった場合、丁寧でゆっくりとした発音であれば fic[ɐɐ]qui ともなりうるが、通常の発話であればむしろ fic[a]qui と実現されるほうが自然である。

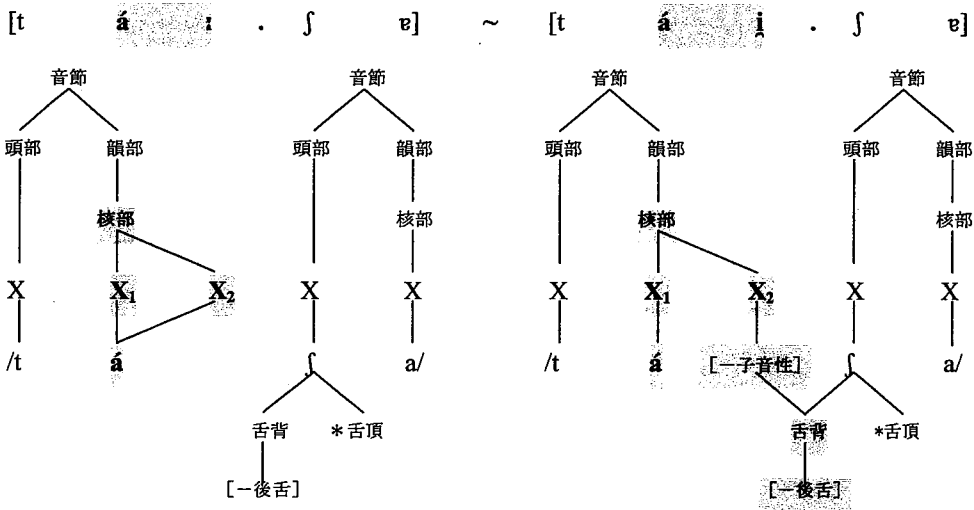
この共時的な母音縮合 *crase* は、§2-1 で論じた音韻的長母音 /V̄^{xx}/ と音韻的単母音 /V̄^x/ を区別する枠組みを用いれば、*fica^x aqui^x* > *fica^{xx} aqui^{xx}* > fic[a]qui と解釈可能である。すなわち、*fica^x* と *aqui^x* の *a* はどちらも音韻的単母音 /a^x/ であるから、これら2語が単独で発音された場合は、無強勢のもとで音質の変化が生じて [ɐ] と実現されるが (fic[ɐ] と [ɐ]qui)、この2母音が発話で連続した場合は、母音接続が嫌われて1つめの *a* が脱落し、その音韻的位置 X を後続する2つめの *a* が占めるようになる。その母音縮合からは音韻論的長母音 /a^{xx}/ が生じ、それが音声レベルでは [a] と実現されることになる (fic[a]qui)。これに対して、無強勢開音節の [ɐ] と [a] を別音素の /e/ と /a/ の実現と見なす枠組み (§2-1 : BARBOSA 1983; 1994¹; 1994²) では、このような包括的説明は難しいのではなからうか。こうした言語事実からも、現代の標準 PE において「音韻的短母音 /V̄^x/ と音韻的長母音 /V̄^{xx}/ の対立」と「強勢付与の有無がそれらの実現に与える影響」を指定することが不適当であるとはいえないであろう。

§3. 硬口蓋子音前の開音節に現れる単母音と [i] を伴う二重母音の音韻解釈

本節では、前節で得た「音韻レベルでの短母音 /V̄^x/ と長母音 /V̄^{xx}/ の対立」と「強勢付与の有無がそれらの実現に与える影響」という観点から、/j/ の前での母音のふるまいを検討してゆくことにする。

§3-1. 強勢母音が [V̄:] ~ [V̄i] の変異を示し、無強勢母音が [V] とは音質の異なる短母音の場合

この型の代表的な例には f[é:]cha ~ f[éi]cha ≈ f[i]char, t[á:]xa ~ t[ái]xa ≈ t[ɛ]xar, r[ó:]cha ~ r[ói]cha ≈ r[u]chedo, c[ó:]xa ~ c[ói]xa ≈ c[u]xal などがある。単母音の形に着目すると、強勢開音節では長母音であるが、無強勢音節では強勢母音とは音質の異なる短母音で実現されており、これは基底レベルで1つの音韻的位置 X しか占めていない母音音素のパターンなので (§2-1 参照)、いずれも音韻的には「短母音 /V̄^x/」であると考えられる (f[é^x]/cha ≈ f[e^x]/char, t[á^x]/xa ≈ t[a^x]/xar, r[ó^x]/cha ≈ r[o^x]/chedo, c[ó^x]/xa ≈ c[o^x]/xal)。そして音韻的短母音 /V̄^x/ は強勢開音節ではさらに音韻的位置 X を与えられて音声的長母音 [V] として実現すると考えられるので、f[é:]cha, t[á:]xa, r[ó:]cha, c[ó:]xa など [V̄:] を含む形式はそのように説明可能であろう。それでは、f[éi]cha, t[ái]xa, r[ói]cha, c[ói]xa など [V̄i] を含む形式はどのように考えればよいのであろうか。以下では t[á:]xa ~ t[ái]xa を例にとり、音韻解釈の試案を図式的に示すことにする。



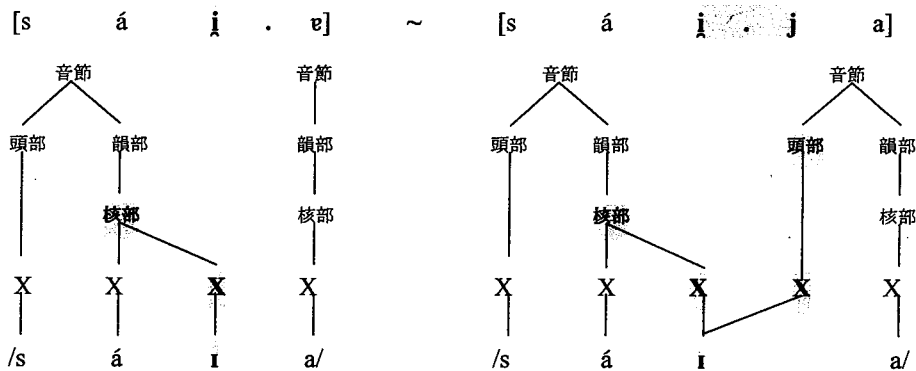
この図式的解釈が意味するところは次の通りである。

- (1) すぐ上でも述べたように、/táʃa/ が [tá:ʃe] と実現される場合、音韻レベルで 1つの音韻的位置 X₁ としか結びついていない音韻的短母音 /á/ の /á/ は、強勢開音節に位置することによってさらにもう 1つの音韻的位置 X₂ が付与され、結果として、2つの連続する音韻的位置 X₁X₂ を占めて音声的長母音の [á:] で実現される (§2-1 を参照のこと)。
- (2) 他方、/táʃa/ が [táɿʃe] と実現される場合、音韻的短母音 /á/ は音声的にも短母音の [á] のままであり、基底レベルで与えられていた 1つの音韻的位置 X₁ しか占めていない。強勢のもとで新たに与えられた音韻的位置 X₂ には、/á/ ではなく、/ʃ/ の副次調音である「前舌 - 硬口蓋調音」(図では、舌背 - [-後舌] で示されている) が拡張し、そこで音節核部が要求する母音的狭窄 ([-子音性] で表示) と結びついて [ɿ] として実現している。⁶
- (3) (2) の前提として、/ʃ/ には主調音である「舌端 - 歯茎調音」(図では *舌頂で表示、* は主調音者を表す) と副次調音である「前舌 - 硬口蓋調音」の 2つの口腔調音が含まれていることになる。

一連の解釈で初めに説明が必要となるのは (3) であろう。ここで第一に考慮すべき点は、[V:] ~ [Vɿ] の変異が /ʒ/ および /ʎ/ の前だけに限られており、これらと調音域が隣接する /s z l n/ の前には現れないことである。ゆえに [Vɿ] の [ɿ] が /ʒ ʎ/ の調音的特性と何らかの関わりを有するのは明らかである。しかるに、これらは通時的には歯茎音 [s z l n] とヨッド [j] の同化によって生じたケースが多い (lat. *rüssēu* > pt. ro[ʒ]o, lat. *cervēsīa* > pt. cerve[ʒ]a, lat. *sēdēa* > pt. se[ʒ]a, lat. *allū* > pt. a[ʎ]o, lat. *tēnēō* > te[ɲ]o: WILLIAMS 1961, p.42, 44, 46, 50, 91). これらの事実に基づけば、共時的に見ても /ʃ/ には [s] の素性である「舌端 - 歯茎調音」と [ɿ] の素性である「前舌 - 硬口蓋調音」が同時に含まれており、

後者が問題の変異に関わっていると見ることは不可能ではなかろう。たとえば、日本語のシャ・シュ・シヨにおいて /sy/ は [ç] と実現されるが、これは、素性を、ある筋肉運動を実行するように脳が音声器官に下す神経命令 (cf. KENSTOWICZ 1994, p.20; p.138) と考えれば、音韻レベルでは /s+/y/ の形で継起する「舌頂に下される歯茎との狭窄命令」と「舌体に下される硬口蓋との狭窄命令」が音声レベルでは同時に実現されてしまい、結果として中間音である「歯茎硬口蓋音」の形をとったものといえよう。標準 PE の /j/ の場合も同様と思われるが、ただしこの言語では /s+/i/ が [sʲ] で実現されることはあっても [j] で実現されることはないので (*passear* /*paɕiár*/ [peɕiár] ~ [pesʲár] 「散歩する」), /j/ にあつては件の2つの神経命令が音韻レベルですでに共起していると考えられよう (音声学的に見ても、標準 PE の [j] は日本語の [ç] に非常に近い音であつて、円唇性が弱く、やはり歯茎音 [s] と硬口蓋音 [j] の中間の狭窄位置を有する歯茎硬口蓋音 (BARBOSA 1994¹, p.63) として実現されることが多い)。

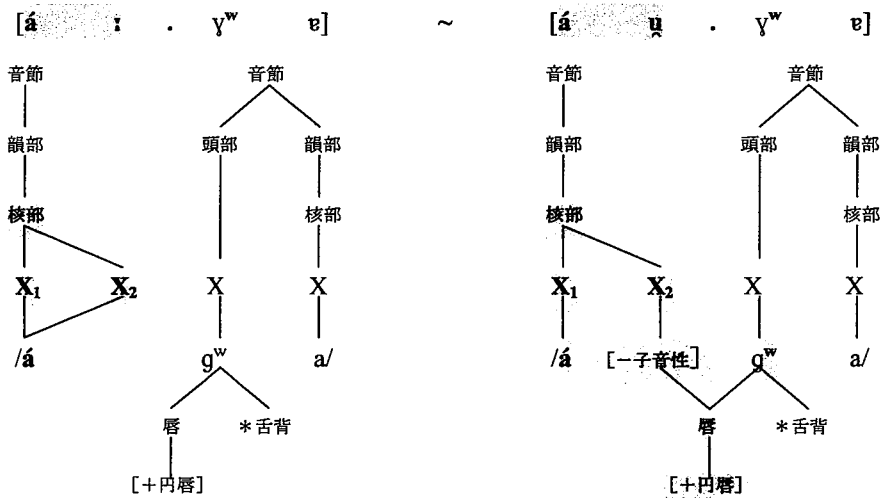
このようにして /j/ に主調音としての舌頂性と副次調音としての硬口蓋性を認めるなら、次に問題となるのは、その硬口蓋性が、(2) で主張されているように、「音節核部」と次音節の「音節頭部」を同時に占めうるのかという点である。これについては、[sáɪ.e] ~ [sáɪ.je] ~ [sá.je]のごとく様々な音節化を許す *saia* /*sáia*/ 「スカート」において /-i-/ が音節内で占めうる位置がその可能性を示唆していると思われる (牧野 2004¹, p.18 および VIGÁRIO e al. 1994, p.477 の *praia* の例を参照せよ)。



この図からわかるように、[sáɪ.e] と音節化された /*sáia*/ の場合、/-i-/ [-i] は音節の核部しか占めていないが、[sáɪ.je] では /-i-/ [-i.j] が核部と同時に次音節の頭部をも占めており、後者の音節化から、標準 PE において硬口蓋性が「音節核部」と「音節頭部」を同時に占めうることは明らかである。

(2) に関しては、強勢母音 /V/ が、後続の「副次調音」である硬口蓋性に2つめの音韻的位置 X₂ を譲ることがありうるのかという点も問題となろう。これについては、[áɾy^{xx}.e] ~ [áɾy^{xx}.e]の変異を示す *água* /*ág^{xx}ua*/ 「水」(ANDRADE e al. 1996, pp.151-152) の中で、強勢母音 /á/ と /-g^{xx}-/ の「副次調音」である円唇調音 /^{xx}/ がどのような音韻的位置 X を占めているが鍵となる。次頁の図からわかるよう

に, [áry^we] では /á-/ が連続する 2 つの音韻的位置 X₁X₂ を占めているが, [áuy^we] では /á-/ は X₁ しか占めておらず, その代わりに X₂ には後続の /-g^w- の副次調音である円唇性 (唇- [+円唇]) が拡張し, そこで [-y-] として実現している. ここから明らかなのは, ひとつには, 母音音素が, 強勢のもとで自身が占めるべき 2 つめの音韻的位置 X₂ を後続の円唇性に明け渡すことであり, さらに, 円唇性が音節核部と次音節の音節頭部を同時に占めうることである. 後者の点に関して言えば, [sá₁je] と実現されうる /sáa/ から明らかなように, 硬口蓋性もまた音節核部と次音節の音節頭部を同時に占めることが可能である. このように円唇性と硬口蓋性は音節内で占めうる位置に関して共通のふるまいを示しており, この共通性を考慮すれば, 強勢母音は, 後続の /g^w/ の「副次調音」である円唇性に 2 つめの音韻的位置 X₂ を譲ることがあるように, 後続の /j/ の「副次調音」である硬口蓋性にも同じふるまいを示しうると考えてもよいのではなかろうか.



最後に, 以上 (1) (2) (3) で展開された解釈は, 音韻的短母音 /V^x/ が強勢開音節では新たな音韻的位置 X を与えられて音声的長母音 [V:] で実現されるとの解釈 (§2-1) を前提としているが, このことは, 音韻的短母音 /V^x/ が, 強勢が付与されずに音声的短母音にとどまる無強勢音節では [V:] ~ [Vi] の変異が認められないことから裏づけられよう (§1 を参照のこと).

§3-2. 強勢母音が [V₁] ~ [V₁'] の変異を示すのと平行して無強勢母音も [V] ~ [Vi] の変異を示す場合

この型の代表的な例は *relaxa* ≈ *relaxar* 「緩める」などであり, /ʒ/ の前に位置する母音が, 強勢開音節で [á:] ~ [ái] の変異を示すのと平行して, 無強勢開音節でも [a] ~ [ai] の変異を示す (rel[á:]xa ~ rel[ái]xa ≈ rel[a]xa ≈ rel[ai]xa). 単母音の形に着目すると, 強勢母音 [á:] と無強勢母音 [a] で音質の違

いがないことから、 $\text{rel}/\acute{a}/\text{xa} \approx \text{rel}/\text{a}/\text{xa}$ のように基底に音韻的長母音 a^{xx} を有すると考えられ (§2-1 参照)、これを含む形態が音声的に実現したのが $\text{rel}[\acute{a}i]\text{xa} \approx \text{rel}[\text{a}i]\text{xa}$ である、と考えられよう。二重母音を有する形式に関しては、 $\text{rel}/\acute{a}i/\text{xa} \approx \text{rel}/\text{a}i/\text{xa}$ のように、音韻的長母音 a^{xx} が基底で有していた音韻的位置 XX の 2 つめを後続の /j/ の副次調音である硬口蓋性 (便宜上 /j/ と表記する) に譲って a^{xx} となり、これを含む形態が音声的に実現されたのが $\text{rel}[\acute{a}i]\text{xa} \approx \text{rel}[\text{a}i]\text{xa}$ であると解釈できよう (硬口蓋性の拡張については §3-1 を参照)。これに対して、問題の諸形態は $\text{rel}/\acute{a}i/\text{xa} \approx \text{rel}/\text{a}i/\text{xa}$ のように基底に $\text{a}^{\text{x}}/\text{i}^{\text{x}}$ を有しており、それが $\text{rel}[\acute{a}i]\text{xa} \approx \text{rel}[\text{a}i]\text{xa}$ の形で音声的に実現されるとも解釈できるかもしれない。その場合、単母音を有する形式に関しては、 a^{xx} において /i/ が脱落してその音韻的位置 X を /a/ が占めることにより a^{xx} となり、これを含む $\text{rel}/\acute{a}i/\text{xa} \approx \text{rel}/\text{a}i/\text{xa}$ が $\text{rel}[\acute{a}i]\text{xa} \approx \text{rel}[\text{a}i]\text{xa}$ と実現されると考えられよう。しかしながら、たとえば $\text{b}[\acute{a}i]\text{la} \approx \text{b}[\text{a}i]\text{lar}$ 「踊る」や $\text{r}[\acute{a}i]\text{va} \approx \text{r}[\text{a}i]\text{var}$ 「怒らせる」も a^{xx} を有しているが、これらが $*\text{b}[\acute{a}i]\text{le} \approx *[\text{b}]\text{a}i\text{lar}$ や $*\text{r}[\acute{a}i]\text{va} \approx *[\text{r}]\text{a}i\text{var}$ と実現されることはなく、硬口蓋音の前でのみ /i/ の脱落が生じる理由を説明できなければ、こうした解釈をとることは難しいであろう。

§3-3. 強勢母音が常に $[\acute{V}i]$ で実現されるの並行して、無強勢母音も $[Vi]$ と実現される場合

この型の代表的な例は $\text{d}[\acute{e}i]\text{xa} \approx \text{d}[\text{e}i]\text{xa}$ や $\text{enf}[\acute{e}i]\text{xa} \approx \text{enf}[\text{e}i]\text{xa}$ 「束ねる」などである。これらについては、§1 で述べたように $[i]$ を削除した形が多くの話者にとって同定不能なので、この点からは基底に 2 音素連続 $\text{V}^{\text{x}}/\text{i}^{\text{x}}$ を有する可能性がある。⁷

§4. 終わりに

これまでに展開されてきた議論は、すべて、「音韻レベルにおいて 1 つの時間的位置 X としか結びつかない短母音 V^{x} と 2 つの時間的位置 XX と結びつく長母音 V^{xx} の対立」「強勢付与の有無がそれらの実現に与える影響」 (§2-1)、および、「硬口蓋音 /j/ に含まれる 2 つの口腔調音 — 主調音である舌頂性と副次調音である硬口蓋性」 (§3-1) の措置に基礎を置いている。

硬口蓋音前の強勢開音節で $[\acute{V}i] \sim [Vi]$ の変異を示し、無強勢開音節で $[V]$ とは異なる音質の短母音となる母音 (§3-1) は、単母音に着目すると音韻的短母音 V^{x} の性質を示しており、それゆえ $[\acute{V}i]$ の形は音韻的短母音 V^{x} が音声レベルで長母音 $[\text{V}i]$ として実現されたものと考えられる。他方 $[\acute{V}i]$ の形は、音韻的短母音 V^{x} が新たに与えられた音韻的位置 X に拡張せず、後続の /j/ を構成する副次調音の「硬口蓋性」がそこに拡張してきたものであろう。その論拠としては「変異 $[\acute{V}i] \sim [Vi]$ が硬口蓋音の前に限られること」「硬口蓋音の歴史的成立過程とその音声的性質」「*saia/sáia*」の音節化として可能な $[\acute{s}ái.je]$ の存在」「*água/água*」の音声的変異 $[\acute{a}i.y^{\text{w}}e] \sim [\acute{á}y.y^{\text{w}}e]$ の存在」「無強勢音節における変異 $[V] \sim [Vi]$ の欠如」が挙げられる。次に強勢開音節で $[\acute{V}i] \sim [Vi]$ の変異を示し、無強勢開音節でも $[V] \sim [Vi]$ の変異を示す母音 (§3-2) は、単母音 $[\acute{V}i] \approx [V]$ に着目すると音韻的長母音 V^{xx}

の性質を示しており、それゆえ [V:] ≈ [V] の形は音韻的長母音 $\overset{xx}{V}$ の音声的実現であると解釈可能である。他方、[V:] ≈ [V:] の形は、この解釈を出発点とすれば、音韻的長母音 $\overset{xx}{V}$ が基底で有していた2つめの音韻的位置 X を後続の /ʒ/ の副次調音音である硬口蓋性に譲った結果と考えられる（ただし他の解釈も可能ではあるが）。最後に、/ʒ/ の前で問題に変異を示さずに常に [V:] ≈ [V:] と実現される形態 (§3-3) は、暫定的ではあるが、基底に $\overset{x}{V}/\overset{x}{+}/\overset{x}{i}$ を有すると解釈できよう。

- 1 本稿は、日本ロマンス語学会第43回大会（大阪女子短期大学2005年5月22日）における口頭発表に基づいて執筆された。
 2 地理的には Lisboa と Coimbra において、社会的には高等教育を受けた人々に話される変種をモデルとし、公的な場で排他的に用いられ、学校で教授され、マスメディアの発達によって全国の地域方言に影響力を増しているポルトガル語を指す。
 3 /ʒ/ は正確には後部歯茎子音もしくは歯茎硬口蓋子音で実現されるが、ポルトガル語学では伝統的に /n/ と同じく「硬口蓋子音」と呼ばれている。私見では、分節音素論的にこれら4子音は同一の自然クラスをなすと考えられる。
 4 「揺らぎ」とは、たとえば「声」[koe]と「恋」[koi]の記号表現は常に区別する（つまり /-e/ と /-i/ を弁別的に対立させている）一方で、「鯉」はその時々によって [hae] と発音したり [hai] と発音したりする（つまり「鯉」の記号表現に対してはその時々によって /-e/ を割り当てたり /-i/ を割り当てたりしている）ような話者のふるまいを指す用語である。
 5 以下、動詞語基母音での強勢交替を例示するにあたっては、すべて「直説法現在三人称単数形」と「不定詞」を用いる。
 6 素性階層構造については暫定的に HALLE 1995 の調音者モデル articulator model を採用した。
 7 [e:] は音韻的長母音 $\overset{xx}{e}$ の音声的実現とも考えられるが、紙数の都合上、ここではその可能性のみを示唆するにとどめ、解釈の詳細は省略することにする。

【参考文献】

- ANDRADE, Amália e Maria do Céu VIANA (1996): “Fonética”. In: *Introdução à Linguística Geral e Portuguesa*. Organização de Isabel Hub Faria, Emília Ribeira Pedro, Inês Duarte & Carlos Gouveia. Lisboa, Editorial Caminho, pp.113-168.
 BARBOSA, Jorge Morais (1983): *Études de phonologie portugaise*. 2.ème éd. Évora, Universidade de Évora, Divisão de Línguas e Literatura.
 BARBOSA, Jorge Morais (1988): “Notas sobre a pronúncia portuguesa nos últimos cem anos.” In: *Biblos* LXIV. Coimbra, Universidade de Coimbra, pp.329-382.
 BARBOSA, Jorge Morais (1994¹): *Fonologia e Morfologia do Português*. Coimbra, Livraria Almedina.
 BARBOSA, Jorge Morais (1994²): “Portugiesisch: Phonetik und Phonemik.” In: *Lexikon der Romanischen Linguistik*. Ed. HOLTUS, Günter, Michael METZELTIN & Christian SCHMITT. Vol. VI, 2, Tübingen, Max Niemeyer Verlag, §418, pp. 130-148.
 GOLDSMITH, John A (ed.) (1995): *The Handbook of Phonological Theory*. Cambridge, Blackwell.
 HALLE, Morris (1995): “Feature geometry and feature spreading.” In: *Linguistic Inquiry* 26, pp.1-46.
 KENSTOWICZ, Michael (1994): *Phonology in Generative Grammar*. Cambridge, Blackwell.
 MATEUS, Maria Helena and Ernesto d’Andrade (2000): *The Phonology of Portuguese*. Oxford: Oxford Univ. Press.
 TEYSSIER, Paul (1980): *Histoire de la langue portugaise*. Paris, Presse Universitaire de France [Tradução portuguesa: CUNHA, Celso (1982): *História da Língua Portuguesa*. Lisboa, Livraria Sá da Costa Editora].
 TEYSSIER, Paul (1984): *Manuel de langue portugaise: Portugal-Brésil*. 2.ème éd. revue et corrigée. Paris, Klincksieck.
 VIGÁRIO, Maria e Isabel FALÉ (1994): “A sílaba do português fundamental: uma descrição e algumas considerações de ordem teórica.” In: *Actas do 9º Encontro da Associação Portuguesa de Linguística*. Lisboa, Edições Colibri, pp.456-478.
 WILLIAMS, Edwin Bucher (1961): *Do Latim ao Português*. Rio de Janeiro, Tempo Brasileiro (3ªed. 1975).
 池上岑夫 (1984) 『ポルトガル語とガリシア語』, 大学書林.
 牧野真也 (2004¹) 「ポルトガル語—ポルトガルとブラジルの標準変種」. 川口裕司他編『言語情報学報告 No.4 通言語音声研究 音声概説・韻律分析』東京外国語大学, pp.201-222.
 牧野真也 (2004²) 「現代標準 PE の強勢下降二重母音とその音韻解釈」. *Encontros Lusófonos* No.6, 上智大学ポルトガル・ブラジル研究センター, pp.13-20.
 牧野真也 (2005) 「ポルトガル語の硬口蓋子音と母音音素の対立中和もしくは揺らぎ」. 『ロマンス語研究 38』, 日本ロマンス語学会, pp.17-26.